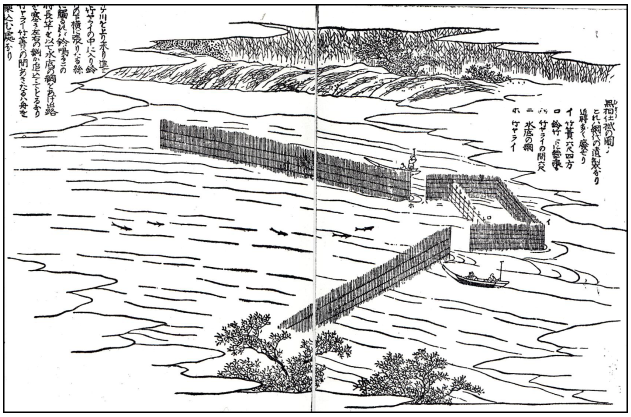
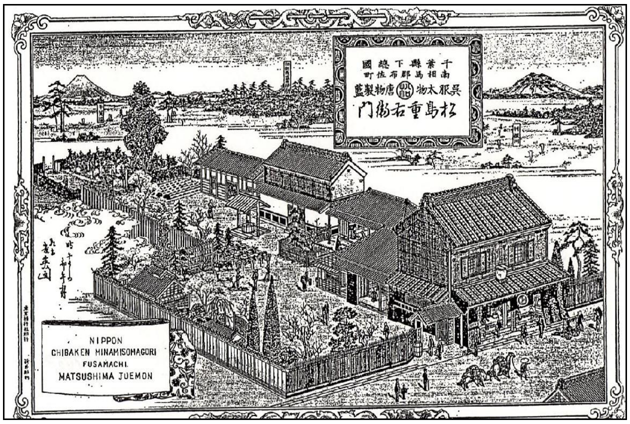
第五章　元“川港町”布 佐

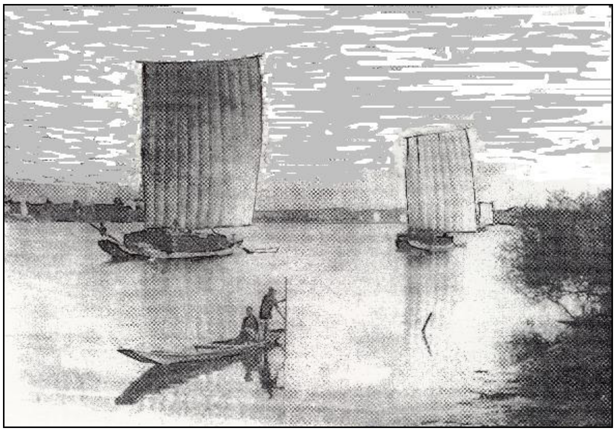
赤松宗旦画に見る利根川網代 と 商家屋敷景観 、高瀬船



利根川網代の図＊1



呉服屋松島重右衛門屋敷銅版画　明治 27 年(1894) ＊2

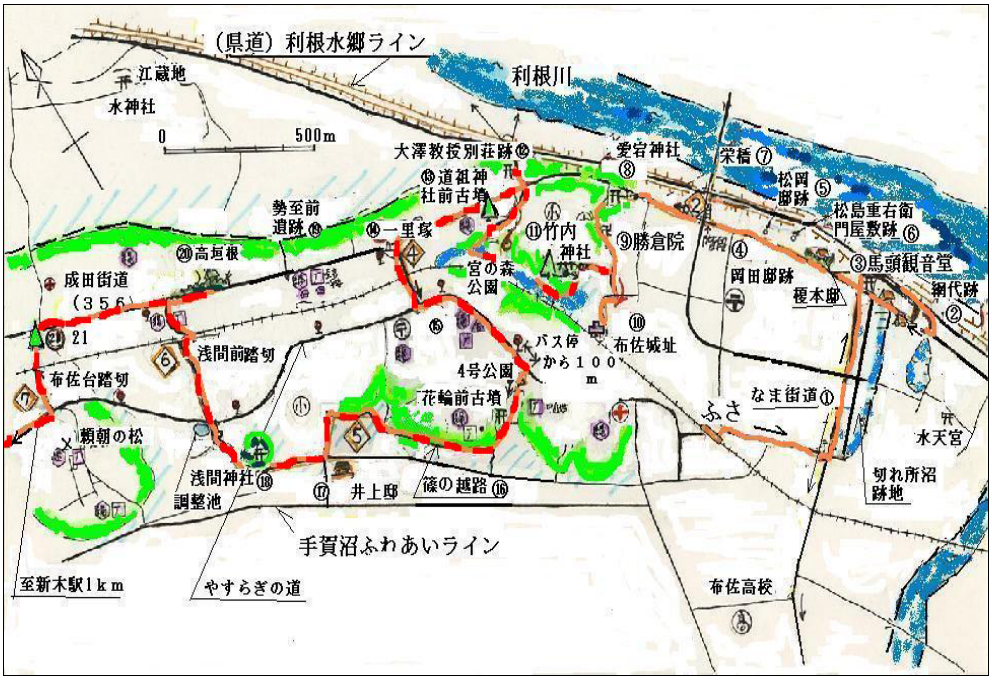


網代付近を上る高瀬船（空、輪郭は修正）＊3

案 内 図

（1） “川港町”布佐（布佐駅東口～宮の森公園） ； 2．5km

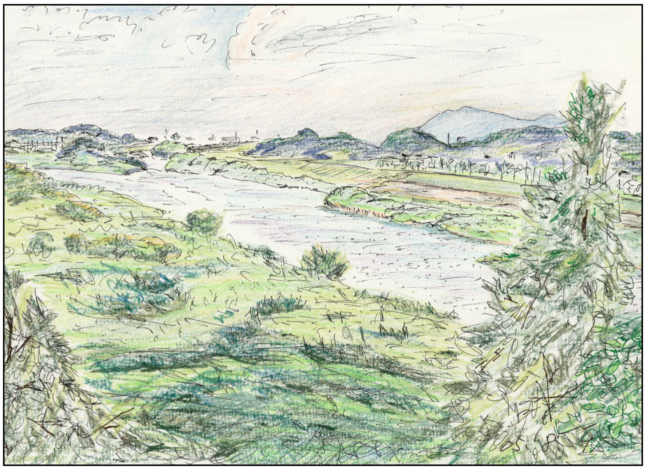
（2） 布 佐 台 （ 宮の森公園～新木駅 ） ； 4．5km



歴史景観スケッチ 6題

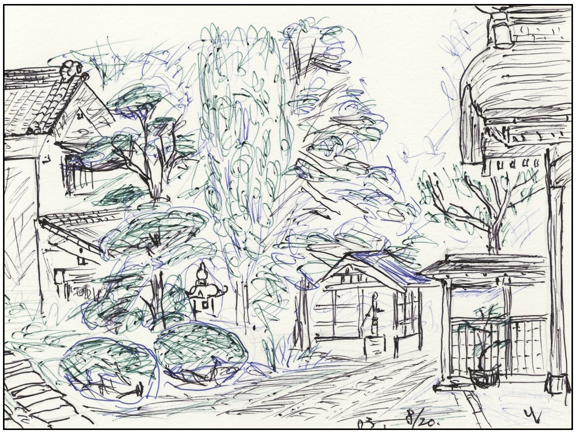
布佐八景で刀寧帰帆と詠われた網代跡

栄橋　　　　　　　　　　　　　　　　　　榎本邸　;　　第10回景観特別賞



利根川風景

大澤岳太郎別荘闌玄(せんげん)荘(東屋)跡からの 「竹岱秋月」と詠われた布佐八景の地、



篠の越路　　　　　　　　　　　登録有形文化財(答申)の江戸風屋敷　井上邸

第一節　歴史景観

利根川は、文禄三年(1594)の東遷工事開始六十年後に、承応三年(1654)の赤堀川通水で誕生しました。そして〟我孫子半島〟の東端にある布佐は、享保年間(1720 年代)幕府の民営化政策に賛同した江戸商人井上徳栄が相島新田を切開いたフロンティアの地です。後には江戸への輸送ルートとなり、川港町(河岸)として栄え、鮮魚街道の出発地点でもありました。

その頃の利根川下流域の風景を拾ってみましょう。

芭蕉は貞享四年(1686)、鹿島の月旅「鹿島紀行」のなかに途中立寄った布佐網代場を書いて以来、布佐は江戸中に知れ渡りました。世が落着いた元禄(1688)に入ると、「木下茶船」が江戸の遊客の間で人気になり、遊覧と香取、鹿島、息栖の三社参詣が盛んに行なわれました。

一茶は文化七年(1810)、高野山の最勝院に立寄った後、布佐、布川に来ています。国学者高田与清も文政三年(1820)に、取手から小堀を訪れて弟子達に講義しました。このような利根川の船旅を楽しむ多くの文人の往来は弟子達を育て、流域文化は生まれました。

水運が盛んになった享和(1800)期に残る船の出入り記録から考えると、高瀬船など大小様々な船は上潮に乗って川を上り、布佐に来ました。しかし、河岸での受渡し法は定まらず、荷の受渡トラブルはよくあったようです。いまも「鮮魚街道」基点に残る駄馬供養の馬頭観音石塔は、元文三年(1738)のものです。観音堂が立てられる六十三年前ですから、元文の頃から「鮮魚街道」はあったものと思われます。

利根川は大型高瀬船の航路として、徳川中期には人口百万の江戸に全国諸藩の特産物を運び〝川の道〟として賑わいました。水戸徳川家三十五万石の高瀬船は、紺地に「丸に白抜きの水の字」の藩旗を船尾になびかせました。仙台藩、会津藩、紀州藩など五十四藩の高瀬船、江戸商人らの船も往来しました。江戸に向かう高瀬船は、最盛期には百数十隻が行き来しました。

船は大型化し、布佐の船大工は、代々この高瀬船を建造し、嘉永五年(1852)には清五郎が米五百俵積高瀬船を建造したとあります。明治四年(１８７１)には川蒸気飛脚船が走りました(付図・5　写真・絵参照)。

布佐〝川港町〟の最盛期はなんと言っても明治・大正の時代です。明治十九年の布佐の人口は2，６４８人です。醤油の町野田は2，７８４人でしたから、当時の布佐は交通要衝、豊かな経済都市の一つであったと思われます。

明治八年には、当時わが国最大手の通運会社、内国通運会社が誕生し、蒸気船「通運丸」が銚子まで運行しました。明治四十三年の通運丸の航路時間表は、東京から明治二十三年建設の利根運河を通り、布佐、木下に停泊した後、銚子に着きました。その時間表は、東京発午後六時、布佐発翌日午前四時四十一分、銚子着十二時二十分でした。

布佐は水上交通の要衝として栄え、多くの豪商が集って蔵屋敷が軒を連ねました。松島重右衛門呉服屋の豪勢な屋敷は日本博覧図に載りました。これらの

商人屋敷の面影は、今も僅かに残っています。

当時の布佐では、布佐八景が漢詩で詠われ、庶民の文化が栄えました。明治六年一月布佐小学校開校と同時に初代校長となった松倉潜蔵が瀟湘八景、近江八景に擬えて作ったという布佐八景は「愛宕暮雪」、「刀寧帰帆」、「竹岱秋月」、「竜崖夕照」、「西山暁鐘」、「鶩湖落雁」、「千崎孤松」、「圯橋夜雨」の八景勝を選んでいます。松倉は佐倉藩士で本名は松倉厚載、漢字に長じ在職中その傍ら塾を開き、門弟が多数集ったと伝えられる。

千葉県医師会長を務めた松岡　鼎　、中央気象台長・サイモンズ賞の岡田武松、そして日本各地で近代土木に、また地域の農業開発に貢献した井上二郎など、当時わが国の指導的立場の人たちが布佐に育ち、柳田國男、島崎藤村、山田花袋、国木田独歩等も布佐を訪ね紀行文を書いています。

第二節　名所解説

(1) 元〃川港町〃布佐

① 鮮魚(なま)街道

当時魚は腸(はらわた)を抜くもの、生き締めのものと鮮魚(なまうお)に分けて籠や箱詰めにして運送しました。銚子から鮮魚を運んだ船を鱻船(なまぶね)＊1と呼びました。

十八世紀末、鹿島灘、九十九里、霞ヶ浦の魚を積んだ鱻船は、屈強な若い船頭三人で、銚子を上潮時の夕刻に出て布佐網代場に力漕されました。翌朝荷揚げされた鮮魚は一日四千籠に及び、其れを松戸河岸までの３０kmを百五十頭の馬で輸送しました。その道筋は、白井町平塚、藤が谷、松戸市金ケ作陣屋を経て松戸河岸です。鮮魚は、銚子を出て足掛け三日目の日本橋の朝市に届きました。豊水期は、生簀の付いた鱻船で関宿を経て運ばれました。

② 布佐馬頭観音堂

利根川沿いに堤防が出来て船が、手賀沼の川口を通過することが出来なくなり、お堂脇が出発点となって、松戸までの七里の陸路、鮮魚街道を馬で運ぶようになりました。観音堂は、十七世紀末の元禄年間に、魚問屋と馬主が馬の慰霊に建てたものです。

③ 網代場跡(第五章表紙、景観スケッチ参照)

ここは布佐台・布川間を掘り下げて通水した急流箇所の下流に当たり、海から昇る魚が一旦留まるところです。そのため、網、投げ網の漁場となりました。天保二年(1831)には仕掛けられた〝網代〟で川が滞流し、村々が水害を受け、幕府が網代を禁止した程といわれます。今は、「魚河岸」と刻まれた石碑が往時を偲ばせてくれます。後には高瀬船や蒸気船が接岸し賑わいました。

高瀬舟は積荷が波しぶきで濡れないように背を高くした舟です。日本の川は浅く、狭くて急流なため、渇水期には荷を満載して浅瀬に立ち往生することがしばしばありました。そこで高瀬船は、船体を細く、船底を浅く扁平にし、浅

瀬に乗り上げても方向転換が容易な船に改良しました。

この頃の情景を柳田國男の「故郷七十年」には次の様に書かれています。

『ⅰ　布川時代

私が布川や布佐にいる間に、利根の川筋はどんどん変ってきた。白帆をかけた川船が減って、川蒸気がずんずん通るようになってきた。川船は、昔は米運びをして関宿まで上がったものだった。ずいぶんえらい話で、銚子からだと二十五里はあるだろう。関宿まで上がってから、今度は江戸川へ入ってそれを下り、市川の近くまで来てそれで横堀に入り、隅田川につながるというわけだった。

ところが川蒸気が出来たので上へ行ってから下へ戻って来るのが馬鹿げているものだから、利根川と江戸川との近よった三角の狭い所に切り通しを作って、往復できるようにしたのが、十分に利用できるまでにならなかった。私はそのコースを通って東京に出て来たのである。利根川も江戸川も、両方とも外輪船がその運河の近くまで来て停まってしまう。お客は土手の上を一里あまり歩いて連絡し、向こう側に待っている川蒸気にのるというわけであった。そうこうしているうちに汽車が出来て問題はなくなったが、この利根川の川蒸気いうのはおかしなもであった。……

ⅱ　私の学問

利根川の白帆

……中略……

布川に行って二，三日目に、私は、その低い松林の上をだしぬけに、白帆がすうっと通るのを発見した。初めは誰かが帆のようなものをかついで松林の向うを歩いているのではないかと思った。何しろ船も見えず、そこに川が流れていることも知らなかったからである。水害の多いところだから出来たのだろうが、その川の屈曲しているところに、約一里ほど長い中の島がかなり急流に洗われながら横たわっていた。布鎌といって、初めはむろん砂っ原だったのだろうが、地味が豊かなので、誰かが行って畑作開墾をやり、そして松を植えたらしい。そこへ屋敷が出来、部落ができた。茨城県側から見ると、手前にある松林と向うの中州の松林とが一つの地続きになったように見えていた。この陸地続きに見えている間を白帆がいくつも通って行くのを見たのだから、私が、はじめ吃驚したのも無理はない。利根の川口から十七、八里も遡った所の松原の上を、そんなふうにして白帆が三分の二ぐらい姿をあらわしながら上下している。

これほど変わった景色を私は大きくなってからも知らない。……』

④　岡田武松邸跡

岡田邸は、地元の人が博士の家と呼んでいました。樹木に囲まれた住居（たたずまい）は、母屋左側に書庫洋館がありました。明治三十二年東京帝大物理学科卒業、中央気象台の予報課長時代に日露戦争があって、日本海海戦時の海域気象を『天気晴朗なるも波高かるべし』と予報しました。東郷連合艦隊司令長官はその予

報文を其のまま引用して有名です。その後、中央気象台長、東大教授兼任、大正十三年イギリス気象学会からサイモンズ賞を受賞。志賀直哉、谷崎潤一郎、鈴木大拙等と共に、昭和二十四年文化勲章を受章しています。昭和三十一年布佐の自宅で八十二歳の生涯を閉じました。跡地は、平成二十年十一月に近隣センターが完成の予定です。

⑤　松岡邸

明治二十年医師で後に布佐町長、千葉県医師会長を務めた松岡鼎（まつおかかなめ）の家は、弟の柳田國男が青年の頃寄宿しました。柳田はこの地で岡田武松と交友し、文学の田山花袋、国木田独歩、島崎藤村等とも論じ、交わりました。

このように松岡は幅広い人脈を持つ篤志家で、医学会の関連もあったのか東京帝大の大澤教授とも親交があったようで、大澤が布佐に住む様になってからは良き相談相手だったようです。布佐文庫は、明治四十一年に松岡が提唱し設立したもので、蔵書は千冊に及びました。当初は勝蔵院に置かれたが現在は布佐図書館に移されています。病院は、最近まで凌雲堂医院として継がれていました。

＊　柳田國男（1875～1962）　松岡鼎（まつおかかなめ）の実弟、明治八年兵庫県生まれ、明治三十三年東京帝大法政治科卒、翌年信州飯田藩出身柳田直平の養嗣子となる。

⑥　松嶋重右衛門呉服屋屋敷（第五章表紙参照＊2）

松嶋重右衛門呉服屋は、現在の大塚石屋さんの西隣にありましたが、昭和三十年頃、新堤防構築のため、今も残る堤防沿いの道に面する屋敷は壊されました。その屋敷は、布佐の最盛期の代表として明治二十七年（1894）日本博覧図に銅版画で描かれ、その背景描写は、富士、筑波山、利根川、手賀沼、和田城跡、布佐台と水田の中の松等、布佐の全ての景観要素を取入れています。

大塚石屋さんの東隣には、榎本武一邸があり、当時の佇まいを今に残す歴史的文化的価値のある民家があります。その庭園の大きな池は当時防火用水を兼ねたもので大切にされていたと言われます。

当時の商家土蔵造りの家並みは、馬頭観音がある交差点から東に味噌醸造の〝やまつね〟付近までの200㍍間に辛うじて残っています。

⑦　榮橋　（景観スケッチ参照）

江戸時代関東郡代伊奈半十郎忠治が布佐・布川間を開削して導水した利根川に懸かる橋です。この橋は地元長年の請願で、布佐・布川両町が十九万円を借りて現在地点から約100㍍下流に架け、昭和五年三月に開通し、同十九年、県に移管後、同四十六年現在位置に架け替えられました。

⑧　愛宕神社

布佐八景の一つ「愛宕暮雪」と詠われた地です。布佐台地の東端、坂南側に位置します。

『愛宕暮雪　老松は亭々とし、凍雲低く垂れる夕べ、微かな風が時刻の鐘を響かせ遠くに消し、三々五々の寒烏が驚き雪を蹴散らし飛び去って行く』。しかし周辺の宅地化で、現在の愛宕神社からその様な眺望はありません。愛宕信仰は京都市愛宕山の愛宕権現、祭神は火の神、早くから神仏合祀を行い、神社を奥院とし、朝日山白雲寺を建て、勝軍地蔵、泰澄大師、不動明王、毘沙門天を奉り、総称して愛宕大権現と称します。いずこの愛宕さんも、おおむね領界、境界の山上に祭られ、展望の地にあるようです。

⑨　勝蔵院

布佐八景の一つ「西山暁鐘」の地。西山は西光山、天台宗勝蔵院の山号です。かつては、境内塚の上の鐘撞堂から畑越しに手賀沼が見えました。そんな村里の風景、農民に知らせる明け方の鐘、そして手賀沼を感じさせる景観情景詩です。その鐘は、戦時中軍に徴用されて無くなってしまったそうです。

⑩　布佐城址（伝承和田城址）

頼朝の腹心、和田義盛が鎌倉を追われ、その子孫がたてこもったという伝承の地。昔の地形は成田線建設時とその後の整地で明応九年（1500）の板碑のある小山が残るだけとなりました。

和田氏の伝承は印西町にもあり「和田義盛の妻巴御前と子の朝比奈三郎とその子孫が住んだ」とあります。

城址は、周辺の整地工事以前の原地形を想定すると、地続きであった頃の布佐と布川が作る湾曲地形の南西部に位置し、現在布佐の街並になっている低湿地帯と手賀沼の出口を望む位置にあります。常陸側の小弓公方足利義明勢とは永年水運をめぐって対立し、延徳五年（1493）の布佐合戦、大永元年（1521）には古河公方方の布佐豊島氏等と小弓公方勢との戦いがあり、元亀三年（1572）にも戦いがありました。

（2）布佐台

⑪　竹内神社（付図・5写真参照）

平将門の乱が平定された天慶三年（940）に祀られた布佐の氏神。祭神は天之迦具土命。合祭主は日本武命と武内宿祢命です。尚、将門の乱で竜崖城主栗巻禅定は戦死しています。

河岸町として栄えた土地柄、山車は活気に満ち、踊る神楽は艶やかです。境内には参道の松の他、市指定の保全樹木である桜、スタジイ、タブ、ツバキ、スギ，榎などが多い。タブの木は海に近いところに多いクスノキ科の常緑高木です。一名イヌグスと呼ばれるが、我孫子での指定樹木数は少ない。

⑫　大澤岳太郎教授別荘　闡玄（せんげん）荘跡（景観スケッチ、付図・5写真参照）

布佐八景の一つ「竹岱秋月」の地。利根川を眼下にする高台にあります。「竹岱秋月」の竹はこの地の竹林、岱は高台のことです。利根川はここ布川・布佐間の狭窄部に

来て急流となり、渦を捲きました。 秋は正に粛々と深まり夜しんしん、松葉は玉色に光る。尽きる事の無い自然の美しさ、ひれ伏す想いがするということです。 この地に東京帝大医科大学解剖学大澤岳太郎教授(明治三十三〜大正九)の別荘がありました。大澤の孫に当る大澤於菟(おおさわおっとー)氏によると、祖父はドイツから来たユリア夫人のフランクフルト望郷のためこの土地を選んだといいます。今も、小貝川との合流地点と筑波山を望む風景は利根川沿いの景勝地です。夫人は昭和十六年にこの地で亡くなりました。榎本邸と同じように池がありました。

⑬ 道祖神前古墳(消滅)と斎藤邸の欅木

356道に緑のトンネルを作るケヤキ防風林のうち1本は保全樹木です。

⑭ 布佐一里塚

当一里塚は成田街道沿い北側にありましたが、昭和三十年代の国道工事で破壊され、今は国道(布佐消防署)脇に石碑のみが残されています。かっては東我孫子の向原一里塚や中里一里塚のように榎の大樹と多くの樹木がありました。 街道沿いにそんな風景が残っていたらどんなに素晴らしいことでしょう。当初の水戸街道は、当時布佐と布川が地続きでしたので、この付近から布川(利根町中田切)に向かったと思われます。

⑮ 余間戸公園と布佐平和台

布佐平和台の布佐余間戸遺跡・古墳は、周辺が縄文草創期の包含地で、古墳(鬼高)時代に集落でもありました。

布佐平和台住宅地は、昭和五十二年に快適な住環境を目指す建築協定に基いて造られました。自治会は、主体的な緑地協定を定め、街並の緑化に努めています。その緑豊な潤いある景観が評価され、第一回景観奨励賞、平成十八年には国土交通省第二回住まいのまちなみ賞を受賞しました。

篠の越路 (景観スケッチ参照)

大きな樹林に覆われる小路と村里の原風景が創る素晴らしい空間が広がる散策路です。

⑰ 江戸風の井上邸 (第三回景観賞受賞・景観スケッチ参照)

平成二十年元旦の広報「あびこ」は、井上家住宅が登録有形文化財に「国の文化審議会が文部科学大臣に答申」と報じました。

江戸時代の歴史的景観を現在に保つ井上家は、四代目徳栄＊3が、享保の改革・新田開発奨励で井澤弥惣兵衛らと共に、手賀沼新田開発に江戸尾張の商家をたたんで参加しました。彼は、相島新田を拓いた農業第一線の指導者で、当家は代々の名主です。

邸宅前には昭和初期、十二代の井上二郎氏の顕彰碑(開発済世の碑)が建っています。彼は明治三十三年東京帝大工学部を卒業し、水道、電力など開発事業

に貢献、またレンガ造りの水門を日本各地に造りました。昭和の手賀沼開拓による耕作民愛護・郷土復興・農村近代化にも意欲を燃やし、「自力更生」を生み出す産婆役を果して顕彰されたものです。

⑱　浅間神社（せんげんじんじゃ）

浅間神社の社叢はスダジイ林が大部分を占めていますが、タブノキ優占林分とアカガシ優占林分も見られます。これらの林分は面積が小さく、組成的には林床の構成種が大変多くあります。しかも、かなりの種が林縁性の低木あるいは草木です。これらの樹木に覆われた静寂な空間があります。

⑲　勢至前遺跡

縄文中期の住居跡2軒　と奈良・平安時代（七～九世紀）の二十一軒居住跡などの包含地です。

⑳　成山邸保全樹木

布佐台バス停南側に大木の樹林があります。そのうちのスダジイ、ケヤキ数本が保全樹木となっています。

（3）　参考解説

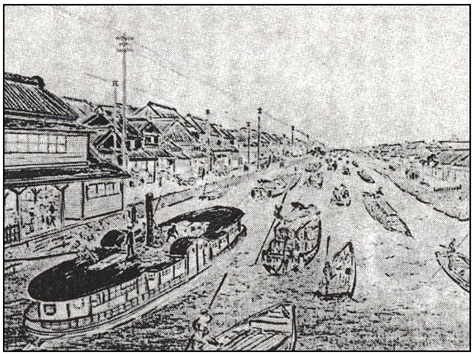
付図・5写真の頼朝の松は、大作谷津と浅間谷津の間の台地、布佐台幼稚園の近くにあった、「千歳の松」とも呼ばれた松の古木です。　頼朝が伊豆を逃れて房総の地に入り、ここを通った時、明媚な松の袂でしばし旅情を慰めた処といわれています。しかしその「頼朝の松」は二～三〇年前に枯れてしまいました。

現在はその地に新堀重左衛門が再建した嘉永四年（1851）の氏神が祀られ、赤松の若木が植えてあります。

かっての我孫子には沢山の松の木がありました。昭和期前半の古い写真を見ると判ります。

「松島重右衛門屋敷銅版画」の背景にも沢山の松が描かれています。

付図 ・ 5

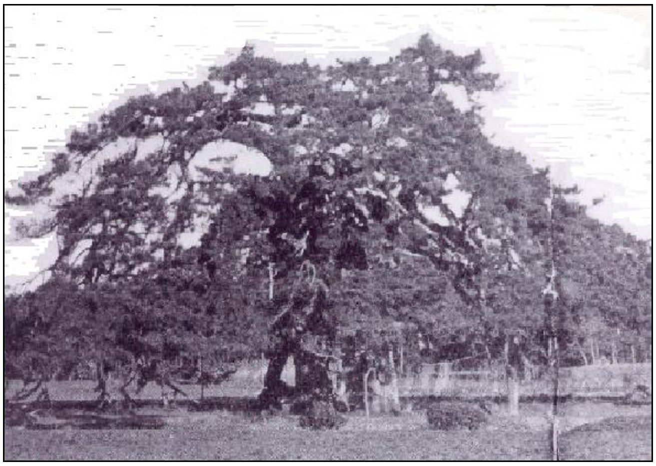


川蒸気船　＊5　（輪郭補正）

大澤岳太郎別荘闡玄荘とユリアさん　大澤於莵氏提供

夜神輿

神輿行列　　市広報室提供



頼朝の松　　（空は修正）　　教育委員会提供写真